



東洋英和女学院

# 史料室だより No.106

2026.5.10発行  
東洋英和女学院  
史料室委員会



## ◆ 筑豊炭鉱「しおんえん」における短期大学卒業生たちの保育活動（1970～1973年）

筑豊炭鉱は、福岡県北東部、遠賀川沿いの直方市、飯塚市、田川市などに広がる日本の主要な石炭の産地でしたが、昭和30年代後半からのエネルギー革命の進行により次々と閉山、そこで働いていた人々は失業し、生活は困窮していきます。今号では、筑豊の田川郡川崎町で、1970年代に無認可保育所「しおんえん」を開園し、地域の子どもたちのための保育の場を切り拓いた、東洋英和女学院短期大学卒業生たちの活動をたどります。

## ◆ 目次

特集	保育者として体現される東洋英和の「敬神奉仕」	
	—「筑豊の子供を守る会」に続く東洋英和保育科卒業生の活躍—	塩崎 美穂 …… 2
〈資料紹介〉	47 東洋英和女学校「クラス日誌」にみる戦時下の学校生活 追記	…… 6
〈東洋英和の先生がた〉	15 功刀 嘉子 先生	
	愛と厳しさで幼稚園師範科を支えた 幼児教育史上のキーパーソン	
		佐藤 浩代 …… 8
〈報告1〉	EDC OG会開催—クラブの歴史をたどる—	……清水 優美子／横江 美乃 …… 10
〈報告2〉	旧ハミルトン・アンド・ハード軽井沢コテージ 感謝をささげる見学会開催	…… 13
おしらせ／利用統計／史料室の活動より（2025年10月～2026年3月）		…… 14



塩崎 美穂

## キリスト教系大学学生による筑豊キャラバン

1950～60年代は、日本の主要なエネルギー源が石炭から石油へ転換し、社会や産業構造が大きく変わる時期だった。閉山した炭鉱の住宅（炭住）での生活は疲弊し、生活保護や出稼ぎを余儀なくされた。なかでも零細炭鉱の多い筑豊地域の被害は深刻であり、その皺寄せは子どもたちに及んだ。土門拳がカメラを通して訴えた『筑豊のこどもたち』<sup>i</sup>の写真集の実情は世に広く知られ、これを支援する活動がキリスト教系学生の間で芽生えた。

1960（昭和35）年、国際基督教大、東京神学大、東京女子大、明治学院大、立教大の学生56名が、夏休みを利用し、一団を組んで遠征するキャラバンを行った。キリスト教奉仕団から支給されたパンとミルクをくばり、各地で子ども会や勉強会を開いた。その後、筑豊の子どもへの支援を継続する必要性が自覚され、「筑豊の子供を守る会」が結成された。それぞれの大学に支部がつくられ、第一回キャラバンでは現地に行かず東京で協力活動をした東洋英和女学院短期大学にも「筑豊の子供を守る会」が誕生した。翌1961年から1970年までに東洋英和短大のキャラバン隊は夏9回、春4回、筑豊へ赴き、参加学生は延べ82名に達した。<sup>ii</sup>

## 「保育学生キャラバン」から「筑豊の保育者」へ

1968（昭和43）年7月、東洋英和短大保育科の新田信恵（現：福貴）、新井照子（現：根本）、松丸泰子

（現：大島）は、「筑豊の子供を守る会」のキャラバンで川崎町の上正（かみしょう）へ赴いた。

このページ右下の写真は、1969年の学生キャラバンのものである。子どもたちのなかに、東京から福岡の炭鉱に赴いた学生だった彼女たちの笑顔がみえる。

「筑豊の子供を守る会」の運動は、各大学の大学紛争の激化にともない沈滞し、ほとんどの大学では、1968年を最後にそのボランティア組織が解体された。つまり、土門拳の写真集が表したような、経済成長のなかで「貧困を見捨てている」ことへの激しい怒りや抵抗の思想は、いわゆる「政治の季節」の終焉と共に終息を迎えていた。

そうした状況下にあっても、東洋英和短大の学生は、東京神学大学の学生とともに最も息の長い活動を続け1970年までキャラバンを行った。東洋英和短大が活動を継続し続けられた理由として、参加学生が保育を学ぶ保育学生であったことがあげられる。東洋英和には他校にはない保育科があり、保育という専門的な知見から子どもや家族の困難に気づくことができた。保育を学ぶ学生たちには、当事者が望む生への敬意をもち、当地での暮らしを支える手立てを見通すことができた。東洋英和の保育学生には、そこで自分に与えられている使命（ミッション）を見出し、当然のこととしてそれを担い貢献する姿勢が身についていたのだろう。東洋英和の学院標語である「敬神奉仕」は、こうして保育者としてのふる



土門拳が「この写真集だけは美しいグラビア用紙ではなくザラ紙で作りたいかった」と語った筑豊炭鉱の写真集表紙



1969年の学生キャラバン。東京から福岡の炭住に赴いた新田、松丸、新井と、すでに現地で働いていた谷がいる。

まいを通して体現された。

しかも、保育学生として活躍した新田、新井、松丸の3人は、1970年3月卒業後に現地に赴いた。当時、3人の先輩の谷光代（現：辻田）が田川教会の幼稚園教諭としてすでに福岡県田川市にいたことが、3人の九州行きにつながった。彼女たちは、その4月から新設の無認可保育所である「しおんえん」で保育者として保育を担っていくことになった。<sup>iii</sup> 東洋英和短大を卒業し20歳になったばかりの3人が、縁も所縁もない九州に移住し、行政からは一円の補助もない園で保育をつくりだしたのである。この奇跡のような「敬神奉仕」の取り組みは、日本の保育をかたちづけてきた歴史の一事象としても、東洋英和の歴史としても、丁寧にその実態を検証し、現在に続く精神的基盤として位置づけられる必要がある。

### 「しおんえん」での保育を担った卒業生へのインタビュー —東洋英和の保育思想—

2025年12月2日、東洋英和女学院の六本木校地で、「しおんえん」の保育者として活躍した福貴（旧姓：新田）信恵さん（福岡県田川郡川崎町在住）、根本（旧姓：新井）照子さん（さいたま市在住）、大島（旧姓：松丸）泰子さん（市川市在住）から直接お話を伺う機会を得た。わたくし塩崎美穂（東洋英和女学院大学教授）が質問し、山下久美元本学准教授（1976年本学短大保育科卒、前かえで幼稚園園長）がオンライン参加、史料室の松本郁子さんと三笠知世さんに記録を取ってもらい、梶田マリさん（1967年本学短大英文科卒、元短大図書館司書・元大学図書館事務長）の陪席もあり、インタビューが行われた。

塩崎が、「しおんえんでの保育内容としては、“山登り”や“どんぐりひろい”があったことは、これまでの記録からもわかります。他にはどんな保育をしていましたか。保育内容や方法の選択、グループの組み方や場所の選定など、先輩保育者がいないなかで、短大の保育科を卒業したてのみなさんがどんな風に保育をしていたのでしょうか」と問うと、3人は次のように語ってくれた。

**大島さん：**「怖いもの知らず」でしたね。地元で保育担当者はいませんでしたし、道具もありませんでした。霊南坂幼稚園で実習しているとき、保育者が「あなたはそういう考えなのね。」「あなたはどのような？」と子どもの声を聴く姿を見て学んでいました。私たちは、そういう保育を英和で学んだと思います。霊南坂幼稚園で学んだのは、子どもたちが自分の思

いを出せるようにすること、穏やかで包みこむような言葉でした。筑豊の自然のなかで遊ぶときに、けがを心配したことはあまりありませんでした。そういえば、子どもにミミズを背中に入れられたりしました。東京の生活ではミミズなんて死ぬほどいやでしたが、子どもたちと遊ぶうちに、「別に（大丈夫）」という感じになっていきました。

**福貴さん：**英和の短大での2年間は、実習で夏休みも埋まっていたのですが、そのうちの2週間はキャラバンにも参加していました。とにかく、ずーっと短大時代は忙しかったです。しおんえんには、最低限の学習で臨んだと思います。短大での経験だけがベースでした。炭住での子ども会活動がキャラバンであって、就職について考えるときに、向こう（九州）へ行って働きたいという気持ちはあり準備はしていました。しおんえんでは、障害をもつ子どもが3年目に入ってきて、その子が行ける距離がそのクラスの散歩の距離になりました。そういうことに対して、子どもたちからの反発はありませんでした。「おたすけおに」「だるまさんが転んだ」など、道具がなくてもよく遊びました。大縄跳びもしました。町の青年団が、なんの遊具もないのでいろいろ用意してくれて、大きな砂場（トラックで砂を運んでつくった）もあり、子どもが大きな穴を掘って、あまりにも穴が大きいので話し合いになって、また埋めたりもしました。

**根本さん：**東京で就職が決まっていた幼稚園には申し訳なかったのですが、福貴さんと大島さんの二人が行くというのを聞いて、「私も行きたい」と思いました。もちろん、東京での水洗トイレがある環境から、トイレは板張り、山水で生活するキャラバンでの生活はカルチャーショックでした。でもそれを経験したので、どこにでも住めると思いました。順応



2025年12月2日、インタビュー当日。左から根本照子さん（旧姓：新井）、筆者、福貴信恵さん（旧姓：新田）、大島泰子さん（旧姓：松丸）

できたのは、キャラバンでの経験が大きかったです。



しおんえん開園当時の新田（左から2人目）・新井（3人目）・松丸（4人目）

当然、彼女たちにはそれぞれの人生や経験があり、三人三様の保育実践者だったことが伝わってくる。こうした語りのなかで印象的だったことは、彼女たちの私生活そのものが、筑豊地域での保育実践をつくりだしていく様子だった。

大島さんが「涙や鼻水で顔が光っている子どもがたくさんいました。でも、鼻水くらいでは耳鼻科などに行けない感じでした。『ござっぱり』が難しかったです」といえば、福貴さんが「家庭訪問もあらたまっていくのではなく、普通に家庭に上がり込む感じでした。私たちの住まいにお風呂がないので、お風呂はいろいろなところでいただきました。子どものお家にお邪魔して、『お風呂わいているよ』と声をかけてもらいました」という。子どもの家から「差し入れもよくいただいた。とりめしのおにぎりや野菜なんか」がおいしかったなどのエピソードには枚挙にいとまがない。

筑豊の子どもたちの暮らしは、土門拳によるセンセーショナルな告発を見るまでもなく、経済的にも貧しかったはずだ。いわゆる子どもの姿のなかに現れる「発達」にも、目が向けられなかったはずはない。

日本の保育（教育）や障害福祉分野において、1970年代は「発達保障」の理念が確立し、実践された重要な時期でもあった。革新自治体のもとで「すべての子どもの生活と権利を守り、全面発達を保障する」という方針が出されたり、ヴィゴツキーの『精神発達の理論』（柴田義松訳、明治図書、1970年）が翻訳出版されたりし、人が社会・文化的活動を通じて発達するという見方が再評価された。いきおい、子どもの姿を「発達」という標準化・均質化された視点から捉え、欠損モデル（何が足りないのかを評価し、足りない部分を補おうとする同一化）による保育（教育）実践が行われる傾向があった。

こうした時代状況であったにもかかわらず、彼女たちには、子どもの「発達」をことさらに心配し、「貧しさを克服しなければならない」というような

前のめりの語りがみられない。「教育しなければならない」とされる、啓蒙の対象として子どもたちやその保護者、地域の人たちを見ていない。共に生き、自分たちこそが頼りにする仲間として、保護者や子どもに敬意を払っていたことが伝わってくる。

幸せに向かおうとする保育実践が、政治的闘争としてではなく、その土地に生きる子どもたちの日常を彩る文化的営みとしてつくられていたことの意味の大きさにあたためて気づかされる。彼女たちはいう。「自分たちは、当時、そこまで学生運動をしていませんでした」「ベ平連のデモに行くくらいでした」と。他大学の学生たちはおそらく学生運動の一環として筑豊キャラバンに行く側面があっただろう。ただ、東洋英和の保育学生たちは、保育という専門性ゆえに、同じ人間として当地の人々と共に貧しさのなかにも幸せを見出す実践をつくりだし、地に足のついた実直な保育を行うことができたのではないだろうか。とくに目立つこともなく（当時あった取材を彼女たちは断ってもいる）、でもあたたかく子どもに向き合う実践のなかで、保育者としての自らの使命を見出していったと考えられる。

#### しおんえん開園—筑豊の地に保育の場をつくる—

ここに「しおんだよりNo.1」という色褪せた藁半紙のお便りがある。「しおんえん」の開設にあたり、1970（昭和45）年4月18日に発行された「保護者の殿」に向けた手書きのお便りでは、漢字にひらがなでルビがふられている。

入園式も済み、いよいよ子どもたちも一人だけをする時がやってきました。入園してからの注意等をお読みになり、一日も早く子どもさん方が園になれ、楽しい保育園生活が送れますよう。又遊具も少なく園もまだまだこれからというところす



ガリ版でお便りを刷る保育者

が、教師一同は<sup>きょうし いちどう</sup>はりきってやっていくつもりですから、どうぞよろしく<sup>ねが</sup>お願い致します。

このお便りからは、保護者の識字状況への配慮が感じられる。元産炭地の川崎町には閉山炭住と共に多くの被差別部落<sup>iv</sup>があった。しおんえんに通う子どもの保護者を含め地域の識字率は低く、「就学前からの教育」や「親が安心して働ける保育所設置」は喫緊の課題だった。貧困に加え自らが教育を受けられなかった親たちは「子どもにはせめて教育を受けさせたい、差別に負けない子どもに育て欲しい」と願っていた。

しおんえんの設立に尽力した松崎一は、1961年「筑豊の子供を守る会」で閉山炭住に学生キャラバンとして入り、1963年には関西学院大学を一年休学、炭鉱が「戦後最大の部落産業」であることを突き止めていた。<sup>v</sup> その後1970年、すでに学生キャラバンの



保護者（祖父）がつくった砂場で夢中になって遊ぶ子どもたち

の全国組織は解体していたが、東京の大学生がまだ筑豊を訪れる活動を続けており、それが東洋英和短大の新井、新田、松丸だったのである。学生だった3人が「保育者として働きたい」と申し出たおかげで、行政からの支援金はなく、基本的に無償で働くことを前提とした保育の場が拓かれることになった（彼女

たちは当時八千円で暮らしていた）。

お便りには、こんな記載もある。

保育時間およびおべんとうの日について

一週間のうち月～金までをおべんとうのある日（9：00～3：00）とし、土曜日はおべんとうのない日（9：00～11：30）にしたいと思いたいが、<sup>へんじ</sup>かがでしょうか。連絡帳にお返事をおかき下さい。

親とともに保育時間も決めていく、民主的な実践であったことが伝わってくる。

山下久美 前かえで幼稚園園長がいうように、1970年代の東洋英和の保育者養成課程では、新井、新田、松丸の偉業について、「東京から離れて九州に移り住み、炭鉱の子どもたちのために保育を行っている伝説の先輩」として授業で語られてはいた。た



真剣に釘打ちをし、木工遊びに集中する子どもたち

だし、東洋英和の保育者養成でのみ語られており、あまり世に出ることのない実践だった。彼女たちがパイオニアとしてかたちづくってきた保育実践については、もっと丁寧に、これこそが東洋英和の保育実践ではないかという問いを含め検証される必要があるだろう。

子どもたち自身が夢や希望を語る自分の人生の主人公になるよう、平和とはなにか、それは差別のない社会をつくる保育実践であるという彼女たちの言葉から、私たちはまだまだ多くを学べると思う。

（人間社会学部子ども教育学科教授）

## 【注】

<sup>i</sup> 1960年パトリア書店から刊行。筑豊の炭鉱、鉱山の休業による失業と貧困を社会に訴えた、ザラ紙を使った100円の写真集。59年12月に2週間の撮影が断行され、体裁の斬新さと内容の切実さが注目を集め10万部を売り上げるヒット作となった。土門は特に子どもたちに焦点をあて、中でも母親が出稼ぎに出た父子家庭の姉妹を捉えた写真は表紙写真にも使われ、広く人々の心を打った。同年、その姉妹のその後の様子を描いた『るみえちゃんはお父さんが死んだ』が研光社から出版され、映画版『筑豊のこどもたち』（脚本：菊島隆三／広沢栄、監督：内川清一郎、製作・配給：東宝）も公開された。77年、新装版『筑豊のこどもたち』が築地書館から刊行された。（以上、富山由紀子による写真史解説参

照 <https://artscape.jp/authors/tomiyamayukiko/>〈2026年3月アクセス〉より）

<sup>ii</sup> 東洋英和女学院百年史編纂実行委員会編『東洋英和女学院百年史』1984年、430-435頁

<sup>iii</sup> 前掲書、456-458頁

<sup>iv</sup> 被差別部落とは、身分・職業・居住が固定され、前近代に穢多・非人などと呼称された被差別民の居住集落である。明治4（1871）年の解放令によって法的差別は解消されたが、社会的差別や偏見は未だ完全には解消されていない。こうした歴史的差別に対して、部落差別を解消するための教育が「同和教育」として行われている。

<sup>v</sup> 『しおんえん』スタッフ座談会『川崎町立同和保育所設立30周年記念誌』川崎町立同和保育所、設立30周年記念事業実行委員会、2003年、61頁

## 〈資料紹介〉47

# 東洋永和女学校「クラス日誌」にみる戦時下の学校生活 追記

### 時局を鑑み「東洋永和」になっても…

本誌の〈資料紹介〉では、前々号 (No.104)、前号 (No.105) とともに、戦後80年特集として、戦時下の東洋永和女学校の「クラス(級)日誌」を取り上げた。1941年12月の太平洋戦争開戦から、1942年の宣教師ミス・ハミルトンの帰国、1944年の高等女学校となることによる学内での宗教行事の中止、1944年7月以降の勤労動員など、生徒たちの戦時中の日々を日誌の記載からたどった。

その日その場で、生徒たちによって記録された学校生活には、敵性語の使用が忌避されていたはずであるのに英語教育が継続していたことや、表向きには出来ないはずの礼拝が行われていたことなどが垣間見られる。そこには、東洋英和という学校が「東洋永和」になりながらも、「**重大な時局にあって益々キリスト教の意義も重大である**」(1944年4月26日5年生による日誌記録より)と教員が生徒に語りかけるなど、しなやかな強靭さをもって建学の精神を貫き、困難な状況下で教育の業(わざ)を継続していたことがうかがえる。

### 新たに発見された昭和20年のクラス日誌

「史料室だより」No.104では、現在確認されている戦時中のクラス日誌は39冊とお伝えしていたが、その39冊を通して見た結果、肝心の1945(昭和20)年の6月初旬から終戦までの学校生活を記録

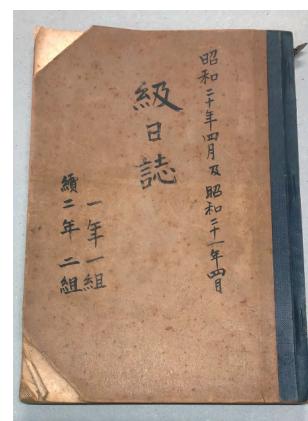
した日誌の記述が欠けていた(表1参照)。史料が発見されていない可能性もあるが、おそらく勤労動員されている3、4、5年生の日誌は勤労動員の作業日誌に移行しているため、その学年のクラス日誌は存在していないようである。また、2年生は、空襲が激しくなる中で5月あたりには出席者が少なくなり2組合同の授業も増え、5月13日あたりから「**今日から、区役所から来たお仕事を三日致します**」という記録が出てくるなど、上級生の勤労動員の作業同様、機密性の高い作業を担うようになったのか、2年生のクラス日誌も1組2組合わせて、1945年の6月初旬から1945年の9月中旬まで記述がない。授業が継続しているらしい1年2組の日誌も5月24日から10月31日に記述が飛んでいた。

私たちの関心はどうしても8月15日の終戦に至るまでの、戦況が熾烈になっていく日々に向けられる。生徒たちはどのような学校生活を送っていたのだろうか…。

そうしたところ、中高部の地下倉庫に古いクラス日誌をしまっているロッカーがあるということで、史料探索を行った結果、昭和20年度の1年1組のクラス日誌が新たに発見された。その日誌は、一時的な休校期間による無記載はあるものの、日誌は継続して記述されており、終戦まで学校に通い続けた1年1組の生徒たちの様子を綴った貴重な記録であった(表2参照)。以下に、その内容を紹介したい。

資料番号	学年とクラス	日誌が書かれた期間	記載が途中で無くなる期間	備考
1201822083	2年1組	1945(昭和20)年4月6日～1946(昭和21)年11月21日	1945年6月5日以降記載無し。1945年10月23日に記述再開。	3冊を合わせてみると、1945年の6月初旬から1945年の9月中旬までの学校の様子が不明だった。
1201822084	2年2組	1945(昭和20)年4月18日～1946(昭和21)年10月11日	1945年5月25日は日付と当番名などが書いてあるだけで、以降記載無し。1945年9月17日に記述再開。	
1201822086	1年2組	1945(昭和20)年4月11日～1947(昭和22)年3月19日	1945年5月23日以降記載無し。1945年10月31日に記述再開。	

資料番号	学年とクラス	日誌が書かれた期間	記載が途中で無くなる期間	備考
1202510018	1年1組	1945(昭和20)年4月11日～1946(昭和21)年4月13日	一時的な休校期間による無記載はあるものの、基本的に日誌は継続して記述されていた。	ただし1945年8月15日～17日は休校のため記載無し。



新たに発見された昭和20年度のクラス日誌

## 欠けていた春から終戦前後までの記録が埋まる

1945年の4月11日が始業となり、出席53名、欠席18名、1クラス約70名であるが、徐々に人数が減っていく。クラスの人員の総数を見ていくと、5月24日には45名、5月25日には47名、そして6月11日に記述が飛び、87名に増える。ここで人数が増えたのは、1年1組と2組を合同したためだった。すでに史料室に所蔵のあった1年2組の日記が1945年5月24日で中断した理由は、そのためであることが今回判明した。

5月24日がターニングポイントになったのは、山の手の大空襲のためである。学校の周辺一帯もほとんど燃え、隣接していた鳥居坂教会も焼失したが、かろうじて東洋永和の校舎は罹災しなかった。日記には、6月6日から11日まで約一週間焼け跡の整理をしていたと記載があり、自宅が燃えた生徒もあり、そうでなかった生徒は通学し、学校周辺の焼け跡の片づけをしていたことがうかがえる。

6月12日には授業が再開し、6月17日には「始めてローマ字をおそはりました」と書かれている。英語の授業の記述は年度初めから散見され、試験をしていたことも記録されている。

7月5日には「音楽の時間に小林〔悦子〕先生がベートーベンのレコードをかけて下さいました」という和やかな記述はあるものの、度重なる空襲警報の合間に何とかして授業をしている様子は痛ましい。7月17日の日記には、そうした状況下での生徒の心情が以下のように記されている。

「朝早くから警報が発令されました。艦載機がき〔来〕、空襲を続け私達の勉強のさまたげとなってしまいました。／これからもまだまだ戦争は激しくなり敵機の飛行機もき〔来〕このやうなゆうちやうな事はしていられなくなると思ひます。／私達は先生のおつしやる事を守り一生懸命勉強に励み体を丈夫に毎日を過さなければならぬと思ひます。」

8月1日からは「4階へ引っ越し」との記載がある。これは7月31日に陸軍の東京聯隊区司令部が学校に移転してきたため、校舎の2階が司令部になってしまったので、生徒たちは4階に教場を移さなければならなかった。学校内も騒然とした、落ち着かない日々が続いていく。

8月14日にはB29が到来し、国語の授業の一時間

で下校となる。「今日は大変欠席が多かった」とあるように、通学もままならない状況だったのだろう。そうして8月15日を迎えるが、「十五日から十七日まで休校」だったため、終戦当日の記録はない。8月21日には「全校の生徒が集って朝礼をした」、9月6日には「長い間の夏期修練期間も昨日で終り今日は全校の生徒が揃って講堂でお式があり小野〔徳三郎〕院長先生のお講話があり、長野〔彌〕先生のお話があった」とある。ようやく長い戦争は終わり、占領体制への不安はあるものの、学校は少しずつ平時の日常を取り戻していく。9月に家庭調査が行われ、はかまや開襟シャツの配給があり、9月8日には「〔麻布〕三聯隊に米軍が進駐して来るので十日から三日間家庭修練期間」とし、休校措置が取られた。疎開から戻って来た旧友や編入生を迎え、「楽しみを増す為、お話会や御誕生日会をする事」になり、11月1日「今朝始めて礼拝を致しました」とあり、毎朝の礼拝も再開される。新発見のクラス日記は、終戦前後の非常時の学校生活を知る大切な手がかりとなった。

## カナダ ハミルトン校長の強制収容所の高校報告

最後に紹介するのは、戦後の史料であるが1946（昭和21）年度 2年2組のクラス日記である。そのクラス日記の12月18日のクリスマス礼拝にはカナダから再来日した宣教師ミス・コーテスの参加が記録され、コーテスが持参した資料なのか、カナダのブリティッシュコロンビア州レモン・クリークの日系強制収容所でミス・ハミルトンが開いた日系カナダ人のための高校（「史料室だより」No.93参照）の年報が挟まれていた。ハミルトンは、戦時中、カナダの極寒の山間部で敵国人となった日系人に寄り添い苦楽を共にした。そして再び、戦後復興のため来日する。クラス日記は戦禍を越えてもなお途切れることのないカナダの宣教師たちとの絆も今に伝えている。



ミス・ハミルトンが戦中校長を務めたレモンクリーク高校の年報

松本郁子（広報史料室・史料室委員）

## 〈東洋英和の先生がた〉15 功刀 嘉子 先生

### 愛と厳しさを幼稚園師範科を支えた 幼児教育史上のキーパーソン



#### 『保育要領』作成における役割

1935年に東洋英和女学校幼稚園師範科教員に着任した功刀嘉子先生は、1926年の師範科卒業生である。卒業後は静岡英和幼稚園、静岡ホームの保母を経てアメリカに留学。イリノイ州エバンストンにあるNational College of Educationにて幼児教育を専攻し、帰国後は愛清館ナースリー・スクールに携わりつつ師範科に就任された生粋の保育者でもある。宣教師の先生がたが本国へ帰国された戦時下には、日本人初の幼稚園師範科主任として責任をもって教育、運営にあたり、幼稚園が戦時保育所となった期間には所長も務められている。

功刀先生は戦後初期におけるキーパーソンの一人として幼児教育史に名を残す。戦後日本は新しい憲法の下、教育基本法、学校教育法を制定し、大きな教育改革を行った。時の指導者であるGHQの民間情報教育局、教育課初等教育係官ヘレン・ヘファナン氏 (Helen Heffernan, 1896-1987) を中心に『保育要領』が作成されたのはその一環である。現在の『幼稚園教育要領』の源となる『保育要領』は「幼児教育の手びき」の副題をもち、功刀先生は養成校の代表として倉橋惣三氏や山下俊郎氏、坂元彦太郎氏などの幼児教育関係者たちと共に、民主主義アメリカの教育をどのように日本で活かしていくのか協議を重ねられた。子どもを主体とし、幼保を分けて家庭をも含む保育のありようを示す『保育要領』は、今こそ必要な視点としてその重要性が再評価される。待機していた通訳者では意思疎通が十分に図れず、日米の幼児教育事情に精通し、ヘファナン氏のよき友となった功刀先生が交代した。もちろん幼児教育者として執筆もされ、1948年に『保育要領』が文部省より発行されるのに先立ち、講習会講師も務め、戦後保育の指針となるその普及に尽力された。結果として文部省事務官となるために東洋英和を退任されることとなり、生徒たちは誇りに思う一方で、大変悲しんだという。

#### 史料や証言からみる働き

功刀先生唯一の著書『保育教材 幼児の遊びと指導』（凶画の関猛先生と共著）は1944年に出版され、その内容は『保育要領』に反映されている。戦前期の留学体験に基づく保育理論で、卒業生によると著書を授業で用いた記憶はなく、最も紙のなかった敗戦前年にこのような仕事をされていたことに驚きと同時に納得もされる。ノートに書き写さなければついていけない功刀先生の授業は必死であったと複数の方が回想されている。

生徒やその家族への対応に決断、女学校の合同会議、公務出張、入学願書類の印刷依頼などの雑務等、具体的な仕事が記される事務ノートから先生の仕事ぶりが窺える。自己の判断で養成教育を担う立場となり、重責ではあるが功刀先生には充実した時代であったと推察される。戦時下の卒業生は、「生き生きされていた」と証言する。授業は、ナースリー・スクールのほか幼児教育全般、およびノーマル・クラスを担当されていた。終戦後は、疎開から帰ってきていた子どもたちを学校に集めて、先生のご指導の下、寺子屋を始めたという。

#### 師範科教員としての教え

以下に、卒業生の手記、回想を紹介したい（一部筆者修正）。

- ・中肉中背で姿勢よく、はじめての授業に「Hi everybody!!」とグリーンの革ジャンにハイヒールでさっそうと登場され一同びっくり。新年度の落ち着いた雰囲気がすっかり明るいクラスに変わったのを覚えています。戦争中でしたから、素晴らしい恰好にみんなで「かっこいい」と言っていました。インドネシアからの留学生にはフランス語と英語で教えていらっしゃいました。
- ・初めての授業、私たちの前にお立ちになった先生がしばらく黙っておいでのご様子をじっとみつめていました。窓のほうを見ていらした先生は開口

一番、「なんですか、あのうすぎたないカーテンは」「はずしてしまえば…」(そのような意味のことをおっしゃいました)。ちょっとびっくりしました。なぜ、今、カーテンのことを？とその日の講義については全く覚えていません。後日2年生との(功刀先生の)合同授業があり1・2年生混合でいくつかのグループに分かれ、それぞれ校外へ出かけました。私たちのグループは新聞社見学、社内の様子、印刷の工程などを見学しました。後年、先生のおっしゃったカーテンのことを思い出しました。カーテンは外を遮るもの、社会のこと、いろいろなことを自分の目、耳で知り、学ぶことの必要を、そうあるべきと示してくださったと。教室、校舎、園内に留まらずにと、私自身のためにも、保育のあり方にもそのことの大切さを教えていただいたと思います。

- ・子どもは甘やかさない。かわりにHugとKissをしてあげること。
- ・子どもと話すときにはいつも子どもの目線に合わせる。他の子どもが話しかけてきたら「今、この子と話しているから順番にね」と子どもの人格を大切にすること。
- ・コロナ下、町が静まり返った様子が戦時を思い出させる。功刀先生がいらしたらどんなことをおっしゃるのだろう。きっと「笑っていきましょう」そして「正しく状況を見極める冷静さをもって行動するように」だろうか。そんなことを思う。

### 教え子の方がたにお話をうかがって

7年前に始めた卒業生への聞き取りには、必ず戦争の時代であったことが語られる。戦時下の方は「クヌセン！」の愛称と生徒を全力で導く芯の強さと親身な気遣い、戦後の方は自由に勉強できる喜びに溢れていた娘時代に功刀先生がいらしたことを、それぞれの記憶から呼び起こされていた。ものをはっきりおっしゃるおしゃれな先生は共通する姿であった。

### 【おもな参考文献・史料】

- ・関猛・功刀よし子共著『保育教材 幼児の遊びと指導』照林堂書店、1944年。
- ・佐藤浩代「功刀嘉子の保育論」『保育学研究』第59巻第2号、7-18頁、2021年。
- ・「事務日誌」昭和18年度、資料ID：1201822276。



指圧講習に立ち会う功刀嘉子先生(右)(1944年)

### 【お話やお手紙をくださった卒業生のみなさま(敬称略、卒業年)】

森安恵子(1944) 藤井菊枝(1945) 藤本和子(1946) 森真佐(1946) 丸岡明子(1947) 赤羽美代子(1948) 寺西誼子(1948) 片桐和子(1949) 小島富美子(1949) 松本幸子(1949) 辻富士子(1949) 藤岡千枝子(1950) 菅沼静恵(1950) 芝恭子(1953)

感謝をもってお名前を記します。

佐藤 浩代

(東洋英和女学院短期大学保育科卒業、本学大学院修了。本学人間社会学部子ども教育学科講師)

### 功刀 嘉子(くぬぎ・よしこ)先生

#### 一略 歴一

1905年10月14日	山梨県甲府市に誕生
1918~24年	山梨英和女学校在学
1923年	甲府教会にて受洗
1924~26年	東洋英和女学校幼稚園師範科在学
1926~30年	静岡英和幼稚園勤務
1930~32年	静岡ホーム(ナースリー・スクール)勤務
1932~35年	米国イリノイ州エバンストン National College of Education 在学(Bachelor of Education 取得)
1935~?年	亀戸幼稚園愛清館ナースリー・スクール勤務
1935~48年	東洋英和女学校幼稚園師範科教員
1945~46年	東洋永和保姆養成所附属戦時保育所長
1947年	幼児教育内容調査委員委嘱
1948年	文部省より学校教育局初等教育課 事務官(嘱託)任命
1952~71年	大阪学芸大学(現 大阪教育大学) 幼稚園教員養成課程教員
1996年6月10日	召天(享年90歳)

清水優美子／横江美乃  
(1988年高等部卒業)

2025年11月8日(土) 14:30-16:30、東洋英和女学院中高部英語劇部(English Drama Club, “EDC”)のOG会が開催されました。本稿ではOG会の経緯と当日の様、そして筆者たちが調べた「EDCの歴史」について、ご報告申し上げます。

### EDC OG会の経緯と当日の様

このはじめは約1年前。EDCのOG数名が楓祭で偶然顔を合わせ、「EDCのOG会ってこれまで開催されたことはないけれど、一度やってみたいよね、声をかける学年を限定して少人数ならできるかしら?」という軽いノリで始まったOG会構想。しかし、そんな小さな話で収まらないのが英和生。OG会の噂はじわじわと広がりを見せ、いつしか、引き返すことのできない大きなうねりとなっていました。強力なメンバーを幹事グループに招き入れ、ネットワークを駆使して連絡先を拡大し、東洋英和女学院同窓会をはじめとする関係各所のお力添えをいただき、11月8日、ようやく迎えた開催当日には、1971年卒から現役高3生までの幅広い年代から合わせて130名が参集! 顧問をお務めいただいた先生方5名(中村裕子先生、松田昭彦先生、楠山眞里子先生、大友香里先生、ジョン・ガルシア先生)も足をお運びくださいました。

14時頃から出席者が揃い始めるとともに、広々としていたはずの中高部集会室はいつしか手狭な様相を呈し、次第に熱気を帯びていきました。生徒時代には声をかけることも憚られた麗しの先輩方、かわいい後輩たち、そして苦楽を共にした同級生と再会を喜び合い、写真を撮り合う皆さまの姿。それはまさに幹事冥利に尽きる光景でしたが、同時に、2時間という限られた時間枠を守るのかどうかを真剣に危惧した瞬間でもありました。しかしそこは、さすが英和生、さすがEDC。どんなにおしゃべりに夢中でも、ひとたび一致団結すれば無敵です。司会者の必死の呼びかけがどうにか浸透し、予定開会時刻である14時半から数分遅れでOG会をスタートすることができました。

はじめに、長く顧問をお務めくださった奈良みどり先生のご逝去を悼み、お祈りをささげました。

その後のプログラムは、次のような順序で滞りなく進行しました。

・幹事を代表して長谷川紀子様(1974年卒)のご

挨拶

- ・「EDCの歴史」プレゼンテーション(後述)
- ・約1時間の歓談時間
- ・松田先生のお話
- ・2025年卒OGによる「最近のEDCについて」のプレゼンテーション
- ・中高部大講堂にて集合写真撮影

大講堂は、中高卒の英和生にとって毎日の礼拝を守った特別な場所。EDCのOGにとっては、楓祭を筆頭にクラブ活動の思い出のつまった青春の舞台でもあります。集合写真を撮影した後も、グループ写真を撮り合ったり、その場に佇んで大講堂の雰囲気全身で味わったり。大切な場所で懐かしさと去り難い思いを共有しつつ、お開きの時間を迎えました。



### EDCの歴史

さて、前述のとおり、OG会では前半に「EDCの歴史」についてのプレゼンテーションを行い、約60年にわたる楓祭と、楓祭が始まる前のEnglish Dramaについてお話ししました。



筆者たちによるプレゼンテーション

このプレゼンテーションは、OG会の大規模開催が確実にようになってきた頃から準備を始めたものです。筆者たちは史料室に通い、68年分（1957年～2024年）の生徒会発行「楓」、そして57年分（1968年度～2024年度）の楓祭パンフレットを1冊ずつ調べました。「楓」に掲載されているクラブ活動報告からEDCのページを見つけ出し、写真を撮り、それをWordにおこして体裁を整える…という作業を68年分繰り返しながら、楓祭パンフレットに掲載された情報と齟齬がないかも確認しました。



(上) 1957～2024年の「楓」  
(下) 1968年度から2024年度の楓祭パンフレット



また、「楓」が復刊される前の時代については、1949年からほぼ毎月発行されていた「東洋英和新聞」を参照させていただきました。

こうして得られた情報から、まず、楓祭におけるEDCの上演作品を一覧表（表1、12頁上段）にまとめました。第1回の楓祭から60年近くにわたってEDCの舞台は続いてきましたが、上演作品の傾向は20世紀と21世紀で面白いほど異なります。20世紀は、シェイクスピアなどの古典や英文学作品、オペラなどが原作で、最後は悲劇的な結末を迎える重厚な内容の作品が多く、EDCといえば悲劇、という時代でした。これに対して、21世紀に入り、現在の新マーガレット・クレイグ記念講堂（大講堂）が使われるようになってからは、もっぱらミュージカルが優勢。英語のセリフに加えて歌とダンス…どんな猛練習を重ねているのか、オールド世代にとっては眩しく、また羨ましく感じられる環境です。重厚な悲劇からミュージカルへ、時代は変わっても、EDCにとって楓祭の公演こそが1年の活動の中で最も重要な舞台である、という位置付け、そしてその舞台にかける青春のパワーは、不変です！

楓祭が始まる前の時代については、1949年と1962年という2つの重要な年号に注目しました。1949年は校友会（先生と生徒からなる、現在のク

ラブや生徒会の源流となる組織）が改組され、「英語部」が発足した年です。英語部では、英会話や英文法などのお勉強のほか、English Dramaにも取り組んでいたようです。前述の『東洋英和新聞』には「新入生を最も集めた部」という記述があり、英語部はとても人気があったようです。こうしたなかで、いつしか、英語部の中に演劇班が設けられ、その後、英語部から「英語劇部」として独立したのが、2つめの重要年号である1962年でした。この時代の先輩方は、生徒活動発表会、校友会ステージ部門発表会、創立記念祭などの場でEnglish Dramaを上演していました（表2、12頁下段）。

このように、戦後に花開いていった英語部・英語劇部の活動。それは突然始まったものではなく、さらにその前の時代にたしかな源流がありました。その様子は、『東洋英和女学院140年史』の“archives 6「大文学會執行順序」「文藝會プログラム」—Road to 楓祭—”（52-53頁）に詳述されています。明治時代から、ステージ系のイベントに注がれていたエネルギーは、楓祭に勝るとも劣らない、そんな印象を強く受けました。英和生は昔からパワフルだったのですね！



1930年文芸会の聖劇「生贖」。中央は上野（旧姓：福井）美代子氏（筆者清水の祖母）。この文芸会で英語劇「戦争か平和か」が上演されている。

今から100年以上も前に行われていたEnglish Dramaの歴史。私たちはそれを1年1年積み重ね、たしかに受け継いできました。このように長い歴史があり、自分たちもその一部だった、ということに、深い感慨を覚えます。OG会の開催に合わせてEDCの歴史を知る機会を得たこと、それをご出席の皆さまと共有させていただけたことに、心から感謝申し上げます。



お土産のクッキー。下は大講堂の舞台をイメージしたデザイン

表1 1968年度-2025年度 楓祭におけるEDC公演作品一覧

参考文献：生徒会発行「楓」、楓祭パンフレット

生徒会年度	楓祭No.	開催日	公演作品タイトル	生徒会年度	楓祭No.	開催日	公演作品タイトル
1968	1	1969/4/28-30	真夏の夜の夢	1996	28	1996/10/4-5	Marie Antoinette マリーアントワネット
1969	2	1970/4/28-29	THE TRAPS FAMILY	1997	29	1997/10/3-4	The Merchant of Venice ヴェニス商人
1970	3	1971/5/4-5	Jane Eyre	1998	30	1998/10/9-10	Miss Saigon
1971	4	1972/5/2-3	THE MOUSETRAP	1999	31	1999/11/2-3	ANASTASIA
*1 1972	5	1973/5/2-3	NINOTCHKA	2000	32	2000/11/2-3	Les Miserables
*2 1973	6	1974/2/8-9	Wuthering Heights 嵐が丘	2001	33	2001/11/2-3	Ever After ~真実のシンデレラ
*3 1974	7	1974/10/31-11/2	OTHELLO	2002	34	2002/11/1-2	The Phantom of the Opera
1975	8	1975/10/31-11/1	THE CASE OF THE VELVET CLAWS	2003	35	2003/10/31-11/1	OLIVER!
1976	9	1976/11/1-3	PICNIC	2004	36	2004/10/22-23	Notre Dame de Paris
1977	10	1977/11/1-3	The Lady of the Camellias 椿姫	2005	37	2005/10/21-22	THE KING AND I
1978	11	1978/11/1-3	HAMLET	2006	38	2006/10/20-21	MOULIN ROUGE !
1979	12	1979/11/1-3	シラノ・ド・ベルジュラック	2007	39	2007/10/19-20	Les Miserables
*4 1980	-	1980/10/16-18	The Sound of Music	2008	40	2008/10/24-25	A LITTLE PRINCESS
1981	13	1981/10/8-10	The King & I	2009	41	2009/10/23-24	Beauty and the Beast
1982	14	1982/10/8-10	Anne of the Thousand Days	2010	42	2010/10/22-23	The Phantom of the Opera
1983	15	1983/10/21-22	Cleopatra	2011	43	2011/10/21-22	Romeo & Juliet
1984	16	1984/10/9-10	West Side Story	2012	44	2012/10/19-20	Anne of Green Gables
1985	17	1985/10/9-10	Les Trois Mousquetaires	2013	45	2013/10/25-26	Roman Holiday
1986	18	1986/10/9-10	Aida	2014	46	2014/10/24-25	Snow White
1987	19	1987/10/9-10	Mary, Queen of Scots	2015	47	2015/10/23-24	Cinderella
1988	20	1988/10/9-10	TWELFTH NIGHT	2016	48	2016/10/21-22	The Phantom of the Opera
1989	21	1989/10/9-10	SALOME	2017	49	2017/10/21-22	Peter Pan
1990	22	1990/10/9-10	THE DIARY OF ANNE FRANK	2018	50	2018/10/19-20	WICKED
1991	23	1991/10/9-10	Hamlet	2019	51	2019/10/25-26	Les Miserables
1992	24	1992/10/9-10	Othello	2020	52	2020/10/28-29	Annie
1993	25	1993/10/8-9	My Fair Lady	2021	53	2021/11/10-11	Singin' in the Rain
1994	26	1994/10/7-8	Antigone ギリシャ古代悲劇	2022	54	2022/10/21-22	Romeo & Juliet
1995	27	1995/10/9-10	Annie	2023	55	2023/10/20-21	The Greatest Showman
				2024	56	2024/10/25-26	The Little Mermaid
				2025	57	2025/10/24-25	Les Miserables

- \*1 第5回以前は年度と開催年が一致していない
- \*2 1974年には楓祭が2回開催された
- \*3 第7回以降、年度内の開催が定着
- \*4 楓祭中止のためクラブ発表会にて上演



1970年4月 第2回楓祭で上演された“THE TRAPS FAMILY” (旧マーガレット・クレイグ記念講堂にて)



2024年10月 第56回楓祭で上演された“The Little Mermaid” (新マーガレット・クレイグ記念講堂にて)

表2 生徒活動発表会、校友会ステージ部門発表会、創立記念祭などにおける上演作品一覧 (1957年の復刊第1号「楓」以降)

参考文献：「楓」

1956/7/18	良きサマリヤ人
1957/11/7	父母招待文芸会にて詩とうたとお話を披露
1958/11/7	若草物語
1959/11/4-6	The Stolen Prince
1960/11/5	ベニスの商人
1961/11/6-7	シラノ・ド・ベルジュラック
1962/11/7-8	The Pampered Darling
1963/11/7-8	トム・ソーヤーの冒険
1964/11/10-12	リア王
1965/11/4-5	雪の女王
1966/11/3-4	Sleeping Beauty
1967/11/?-?	青い鳥
1968/5/2-3	Little Women 若草物語

## —「文化財登録10周年 感謝をささげる見学会」開催—

東洋英和女学校の第15・17代校長を務めたミス・ハミルトン (Frances Gertrude Hamilton) と親友のミス・ハード (Helen R. Hurd) の両宣教師が所有していた別荘「旧ハミルトン・アンド・ハード軽井沢コテージ」(1932年頃竣工、W.M.ヴォーリズ設計、建物は非公開)が国の登録有形文化財となってから、2025年11月17日で10年の節目を迎えた。その日に先駆けた10月13日、学院代表として高橋貞二郎院長、楠山眞里子学院顧問、現旧教職員や卒業生がコテージを訪問し感謝をささげる見学会が開催された。

何十年の時を経て東洋英和がその存在を再び知ることになったのは2010年3月のことで、その年の8月1日に関係者が現地を訪れた時の様子は「史料室だより」No.77(2011年11月10日発行)に詳細に記されている。

長らく使われず朽ちかけていたコテージであったが、現オーナーがご自身の別荘地の隣に佇むこの建物を見て、直感的に価値を感じ取り、粘り強く調べを進められたことで、徐々にコテージの来歴が明らかになっていった。その後修復・復元を進め、文化財登録に至ったのは、オーナー夫妻のひとかたならぬご尽力の賜物である(「史料室だより」No.87(2016年11月4日発行)参照)。

東洋英和は2017年以来、コロナ期を除く毎年7月に同窓会役員、卒業生有志、学院関係者による通称「お掃除隊」を結成し、コテージの清掃奉仕を続けることで、オーナーご夫妻やご家族と交流を重ねて維持管理に感謝してきたものの、まとまった形で謝意を示す機会はなかった。2025年のお掃除隊が見学会実現への契機となったのは間違いないであろう。

同年7月20日のお掃除隊では、初めての「開会礼拝」をささげることができた。説教者は山本香織前小学部長。その冒頭のメッセージが強く参加者の心に響いた。

「私たちは現在の六本木の校舎で、かつてカナダからいらした宣教師の先生がたが実際に使われた食器、聖書、ブローチ、あるいは旧校舎から移設された暖炉などを目にすることはできます。でもヴォーリズ校舎がなくなってしまった今、宣教師の先生がたがいらした同じ空間に身を置けるところ、それは軽井沢のここだけになってしまいました。」

終了後「オーナーご夫妻に感謝の気持ちを伝えたい」との声が続々と参加者から届き、文化財登録10周年に合わせて感謝をささげる見学会の開催が検討された。過去のお掃除隊参加者や軽井沢に縁のある卒業生、現旧教職員等にも呼びかけ、参加費を募り、オーナーへの寄付とオリジナルTシャツの作

成に充てることとした。参加がかなわない方からの寄付も相次いで集まった。

当日は天候も程よく、約30名の参加者との開会礼拝で高橋院長は「わたしたち強い者は、強くない者の弱さを担うべきであり、自分の満足を求めるべきではありません。おのおの善を行って隣人を喜ばせ、互いの向上に努めるべきです。」(ローマの信徒への手紙15章1・2節)を朗読し、この聖句を実現したのが両宣教師であり、ヴォーリズ氏であると話された。



コテージの前で行われた開会礼拝

礼拝後、学院からのクリスタル表彰盾と有志による寄付をオーナーご夫妻に贈呈し、学院・卒業生双方からの謝意を表した。コテージの見学では、宣教師達の息遣いを感じる空間から当時の生活へ思いを馳せ、オーナーとの歓談においては、参加者から次々と感謝の言葉が伝えられ、その声が途切れることなく続いた。

見学会終了後、コテージにまつわる「物語」を、学校関係者に広く、また分かりやすく伝えられるよう、山本香織前小学部長の作画による動画を学院のホームページ等を通じて公開した。歴史の一部に留まらず、未来へ受け継ぐべき物語をじっくりと味わってほしい。



オーナーに贈られた表彰盾



「ハミルトン&ハードコテージ物語」を視聴するには…  
①上記QRコード→東洋英和女学院ホームページへ  
②楓アプリ→ニュース(2025年12月22日)へ

(三笠知世 広報史料室・史料室委員)

## 東洋英和幼稚園と小学部の校地と園舎・校舎の記録集を刊行

六本木五丁目西地区市街地再開発事業に伴い、東洋英和幼稚園と小学部は現在の校地と園舎・校舎から離れ、仮園舎・仮校舎（元麻布）、さらには再開発後の本園舎・本校舎（中高部敷地に向かい合った敷地）へ移転予定です。そのため幼稚園と小学部では、それぞれ校地と建物の記録に特化した記録集を作成しました。



### 東洋英和幼稚園『思い出の幼稚園』

2025年3月刊行、16ページ

永井理恵子帝京短期大学教授による論文「東洋英和幼稚園舎・園庭の現在」と、卒園生の飯田優カメラマンによる季節ごとの細部にわたる記録写真で構成。

※卒園生、関係者に頒布



### 東洋英和女学院小学部『校地校舎記録集 1954年～2026年』

2026年3月刊行、132ページ

1954年～2024年度までこの校地で過ごした71学年すべての回想、今の在校生の記録とともに、充実の歴史・年表・資料ページで構成。

※部数限定、販売予定

## 展示コーナーご案内

### ◆村岡花子文庫展示コーナー企画展

#### 「林芙美子と村岡花子 ―文学ジャンルを越えて結ばれた交流―」

林芙美子は昭和時代を代表する作家の一人です。今回の展示では、林芙美子と村岡花子との交流を紹介します。林芙美子を村岡花子は「人間も作品も、私はしんから好き」と評しました。有名な林芙美子の「花のいのちはみじかくて…」という名文句の原典と目される、村岡花子宛の貴重な詩稿も展示いたします。



林芙美子（前列左から2人目）、村岡花子（後列左）と女流文学者たち（1943年）

会期：2026年11月30日（月）まで

### ◆学院資料展示コーナー企画展

#### 「戦後80年によせて 集団疎開の歴史をたどる 出流山満願寺訪問」

東洋永和女学校附属初等学校（現在の東洋英和女学院小学部）では、1944（昭和19）年8月以降、栃木県栃木市にある出流山満願寺へ集団疎開しました。2025年が戦後80年にあたることにちなみ、昨年8月29日に高橋貞二郎院長と小学部教員、学院教職員で出流山満願寺を訪問しました。今回の展示ではその訪問の概要を紹介し、集団疎開時に児童が書いた集団疎開日記（複写）や教員による疎開の記録史料を展示いたします。

会期：2026年8月29日（土）まで

入場料：無料 どなたでもご自由にご覧いただけます／展示場所：東洋英和女学院 六本木校地本部・大学院棟1階／  
公開時間：日曜日・祝日・長期休暇以外の9：00～20：00（土曜日は9：00～19：00）  
※館内の洗面室はご使用いただけません。／団体でのご見学の場合は、予め広報史料室にお知らせください。

## 利用統計 (2025年10月～2026年3月)

		10月	11月	12月	1月	2月	3月
展示見学者数		102	114	94	126	67	104
展示見学者区分	学内関係者	20	28	30	89	43	24
	一般	82	86	64	37	24	80
		10月	11月	12月	1月	2月	3月
資料閲覧者数(累計)		18	13	10	6	10	18
閲覧者区分	本学学生・生徒	1					
	現教職員	2	3	3	3	1	2
	旧教職員	2				1	
	同窓生・学院関係者	13	2	3	2	4	5
	同窓生(研究者)		1	1	1	1	
	学外研究者・学生			2			7
	一般		7	1		3	4
利用の目的	年史編集	1		2	2		
	著述・論文作成		1	1	1	1	4
	伝記資料調査	1				2	6
	記録類の調査・研究	6	5	4	3	3	5
	学院広報関係	1	7	3		4	
	その他	9					3
	資料の種類(重複あり)	東洋英和関係	18	13	10	5	10
	カナダの教会関係		1			1	3
	村岡花子関係		1		1		5
	周辺地域史			4			2
	その他						
		10月	11月	12月	1月	2月	3月
月別レファレンス件数		26	7	6	16	6	14
質問者の区分	本学学生・生徒	1					
	現教職員	11	5	1	4	3	3
	旧教職員	6		1	2		
	同窓生・学院関係者	2	1	2	3	1	3
	同窓生(研究者)		1		1		
	学外研究者・学生			1			2
	学外研究機関						2
	一般	6		1	6	2	4
質問内容(重複あり)	資料所蔵調査	6	5	1	4	3	7
	写真所蔵調査					1	2
	事項調査	14	2	3	4	1	6
	その他	7		2	8	1	2

## 史料室の活動より (2025年10月～2026年3月)

(☆は複数回)

### 2025年10月

- 1日一追悼記念日礼拝(礼拝後、卒業生から寄贈多数)
- ☆学院資料展示コーナー企画展準備
- ☆執筆/編集/校正「史料室だより」No.105
- ☆旧ハミルトン&ハード軽井沢コテージ見学会準備
- ☆編集協力一小学部校地校舎記録集制作
- ☆年表マスターデータ更新、修正(酒井)
- ・照会一平体由美本学教授より、ミス・カートメル愛唱讃美歌について
- ・執筆一「楓園」101号「史料室レター」
- 13日一出張「旧ハミルトン&ハード軽井沢コテージ 文化財登録10周年 感謝をささげる見学会」にスタッフとして参加(高橋貞二郎院長、楠山真里子学院顧問、同窓生有志約30名とともにオーナー夫妻に感謝をささげる)
- ☆校正一大学学生手帳新設ページ「大学の始まり」
- ☆来室/調査一EDC OG会準備メンバー。「楓」などの確認と「楓園」87号 石澤先生執筆の楓祭記事について
- ☆来室/調査一同窓生。1970年代の生徒会活動について
- 17日一学院資料展示コーナー企画展設営「戦後80年によせて 集団疎開の歴史をたどる 出流山満願寺訪問」
- ・来室/調査一中学部生。陸奥宗光息女清子(初期在校生)の在学調査
- ☆制作協力一NHKへ史料提供、インタビュー設定等協力
- ☆制作協力一旧ハミルトン&ハード軽井沢コテージ動画
- ・執筆一大学礼拝週報(コテージ見学会について)
- 22日一ちひろ美術館東京への資料貸出(卒業生でコラージュ作家の岡上淑子氏が戦時中に記述したクラス日誌)
- ・来室/調査一河野和雄元中高部音楽科教諭。ハンドベル関係史料
- ☆活動協力一幼稚園園舎を記録する会
- ・照会一総務課より、幼稚園の初山滋画伯の絵について→画題不明。幼稚園の「園務日誌」には幼稚園を来訪する記録があるが、どういう経緯で絵を受贈したかは不明

- ・来室/調査一山本香織前小学部長。小学部創立記念日祝辞、教員への講話のため、「小羊」など
- ・来室/調査/懇談一山梨英和同窓会役員の方(5名)。展示コーナーや史料室運営について情報交換
- 31日一出張。ちひろ美術館東京「装いの翼」展示内覧会、ギャラリートーク(「史料室だより」No.104特集執筆司干給氏、学芸員原島恵氏による)に参加

### 2025年11月

- 5日一出張。戦時中に小学生だった中村カヨ子氏インタビュー(紹介人の加藤牧菜氏、鈴木陽子小学部教諭と同行)
- 6日一創立記念日。幼稚園にて幼稚園園舎の歴史について年長組保護者へ講話(松本)
- ・来室/調査一金子真奈美本学講師。村岡花子資料
- 7日一第2回 150年史研究会
- 10日一「史料室だより」No.105納品、発送
- 11日一カナダ宣教師墓前礼拝参加(於:青山霊園。松本・三笠)
- ☆校正一総合案内(日本語版)、(英語版)
- ・来校一大分県とPEIとの交流にちなんで、大分県企画振興部長、国際政策課課長
- ☆学院HP改訂作業一史料室関連ページを担当
- 26日一出張。同窓会湘南支部にて、92歳の卒業生を筆頭に、思い出話を語っていただく会に参加

### 2025年12月

- ・資料探索一中高部地下倉庫にて、昭和20年度のクラス日誌を追加発見
- 2日一「史料室だより」特集のため、1970年代の短期大学保育科卒業生「筑豊の子供を守る会」メンバーに、塩崎美穂本学教授が当時の保育活動についてインタビュー
- 3日一卒業生井上二葉氏(ピアニスト)に、NHKスタッフと戦時中の体験についてインタビュー
- ・受領一鈴木陽子小学部教諭より、阿部恵代氏(1961年高等部卒)による小学部の思い出聞き取り記録
- ・納品一改訂版 史料室案内パンフレット

- ☆村岡花子文庫展示コーナー企画展準備
- ☆執筆／編集／校正「史料室だより」No.106
- ☆校正—2026年度事業計画(史料室関連記載)
  - ・照会—酒井順子氏(作家)より、東洋英和の寄宿舎と青楓寮について、「東洋英和」の校名の由来について
  - ・取材—中高部図書室へ、岩波書店出張読書会。読書愛好会メンバーと富岡暢子司書教諭が懇談
  - ・取材—岡野道子芝浦工大准教授(卒業生。幼稚園園舎を記録する会メンバー)による高等部進学ガイダンス
- ☆校正—2027年度大学案内。沿革ページ
- ☆校正／資料整理—ダイヤモンド・オンライン「日本を動かす名門高校人脈」の卒業生情報
  - ・情報提供—三里塚教会を調査中の山本佳典氏より、武藤健牧師、本郷中央教会、カナダ・メソジストのつながりについて詳細報告いただく
- ☆来室／調査—鈴木陽子小学部教諭。教員日誌など
  - ・来室—テリー神川氏(カナダPEI在住、モンゴメリに関する書籍も執筆)

## 2026年1月

- ・納品—同窓会会報(明治・大正時代) デジタル化データ
- ・打合せ—宇田川晴義東洋大学名誉教授／セント・ローレンス大学名誉教授。井上円了夫人の井上敬(旧姓:吉田。元東洋英和女学校教諭)についてなど
- 9日—第3回 150年史研究会
- ☆照会／校正—堀川敏寛本学准教授より、『敬神奉仕 東洋英和女学院大学礼拝説教より』出版関連
  - ・来室／調査—上野峻—中高部聖書科教諭。クラス日誌、宣教師史料、母の会名簿など
  - ・照会—いぬいとみこについて。英和の熱心な先生が港区の女学生を対象に開いていた聖書研究会に参加し、感化を受けて1941年に受洗した→資料見つけられず→後日発見
  - ・校正—エクスマレッジ『死ぬまでに訪ねたい文学館』再版
- 23日—第3回 史料室委員会
- ・見学—小学部3年生。展示コーナー及び史料室(自校史授業「東洋英和の歩み」の一環)
- ・来室—中高部地歴部ボランティア(昭和30年代後半の中高部クラス日誌の整理)
- ・来室／調査—卒業生・研究者。「家庭文庫研究会」会報
- ・来室／調査—渡辺紀子氏・三善三千子氏(両名とも1959年高等部卒、1961年短大英文科卒)。渡辺氏が主宰していた「フレンズの会」(帰国子女支援)資料

## 2026年2月

- ・来客—マッキントッシュ・ジャネット教授(関西学院大学)
- 6日—村岡花子文庫展示コーナー企画展設営「林芙美子と村岡花子」
- ・確認—大学 2026年度「東洋英和の歴史」シラバス
- ☆来室—平田誠牧師、千恵子ご夫妻。「桜プロジェクト」資料年表作成について
- ・来室／調査—鈴木齊元中学部長。桜プロジェクトの発足について
- ☆校正—学院HP輝く東洋英和の卒業生記事 村岡花子
  - ・執筆—「楓園」102号「史料室レター」
- 20日—第4回 150年史研究
  - ・来室／調査—相磯正子(学校初期の教師)のご子孫。『東洋英和女学院資料集5』ほか

## 2026年3月

- ・来室／調査—静岡雙葉中学校・高等学校松岡葉子教諭。史料室の運営や資料保存方法などについて
- ・来室／調査—ICU富岡徹郎常務理事。カナダ・メソジスト教会カックランについて
- ・来客—南葵音楽文庫関係者
- ・来客／調査—カナダ合同教会牧師Won Hur師と日本基督教団ディビット・マッキントッシュ氏。青山霊園のことなど
- ・展示案内—新宿歴史博物館・林芙美子記念館—一行
- ・照会—学外研究者より、戦前タイから保育を学びに来た留学生について
- ・来室／調査—東洋大学井上円了哲学センター—一行。井上円了の妻で東洋英和の教師だった吉田敬について
- ・インタビュー—1949年高等部卒業生に、NHKスタッフと戦時中の体験についてインタビュー。制服腕章(冬服、夏服)、写真も多数ご寄贈いただく
- ☆来室／調査—中高部町島由美子教諭ほか。故佐々木孝男元中高部体育科教諭について→ご子息に関連記事をお渡し
- ・打合せ—幼稚園と移転に伴う資料の移動の検討・検分
- ・展示案内—藁谷友紀新学長とご来賓
- ・照会—NHKより、戦時中の「学校農場」「落書き事件(陰謀事件)」について→関連資料を紹介
- 照会—町田市立自由民権資料館より、石阪登志について

## 【おもな受贈資料】

- ・小学部生が着用していたベレー帽

- ・「しんぼう」(卒業生の長岡輝子朗読カセットテープ)
- ・百周年記念品蠟燭立て(卒業生の清野禮元高等部長から譲られた真鍮製)
- ・町島由美子中高部国語科教諭(1977年高等部卒)より、「蒸気機関車の旅と佐倉機関区見学の会」しおり、小学部「みちのくの旅」(作文集・しおり)、中村メイ子作、脚本「幼いひとたちのためのちいさなバラード『オテガミが見た夢』1965年3月 東洋英和幼稚園 ひつじぐみ ペんぎんぐみ母の会」ほか多数
- ・佐々木利絵元中高部司書教諭、佐々木肇元職員より、ご母堂中野馨子氏のアルバム(戦時中の英和での写真あり)、母の会資料。利絵氏が職中の中高部教職員集合写真ほか多数
- ・平由美本学教授より、2025年度大学宗教委員会作成ミニトートバッグ
- ・テリー神川氏より、モンゴメリの写真(裏に本人の書き込みあり)、PEIの古い時代の写真ほか
- ・福貴信恵氏、根本照子氏(1970年短期大学保育科卒)より 筑豊「しおんえん」関連資料多数
- ・水野誠元中高部聖書科教諭ご遺族より、行事プログラム類1箱、教会懇談会ファイル、音声記録テープ9本
- ・プログラム(大学10周年記念式典・記念音楽会)、「approach」1998年春(ヴォーリス特集)など多数
- ・山本晃嗣中高部教諭より、中3-5「2025 Class 3-5 Official Yearbook」(毎日クラスの写真を撮影したもの)

## (書籍・雑誌・論文)

- ・内藤達元中高部数学科教諭より、「季刊 城南」(城南伝道所の機関紙。南部泰孝先生講義録)ほか
- ・深沢美恵子氏より、自著『韓の国に生きた兄弟を韓の国は忘れない 浅川伯教・浅川巧』揺籃社、2025年
- ・内川由紀子氏(本学大学院卒)より、内川由紀子「書物を愛した官僚が残した『内田嘉吉文庫』」／「内田嘉吉文庫の活用」所収「書物学」第31巻、勉誠社、2025年
- ・社会福祉法人愛の泉より、『愛の泉80年の歩み 2016-2025』2025年
- ・佐佐木朋子氏より、①『佐佐木信綱研究 第16号』2025年(片山廣子についてご執筆)、②『和歌文学大系80 翡翠／川のほとり／ふゆくさ／魚歌』(うち片山廣子「翡翠」について、校注と解説ご執筆) 明治書院、2026年、③「生き延びる歌集『踏絵』」(柳原白蓮についてご執筆) 所収「花美術」vol.92、花美術、2026年2月5日
- ・小林由加氏より、「近代日本の道德教育を再考する—岩下壮一—の教育思想と教育実践—」『日本カトリック神学会誌』36号抜刷、2025年8月(資料提供)
- ・宇田川晴義東洋大学名誉教授より、自著「井上円了の旅路を巡る」、『田中忠雄聖書画集』教文館ほか
- ・ハンドベル部OGより、『東洋英和女学院中学部・高等部ハンドベル部の軌跡』(クラブの50周年を控えての年史)、記念のハンドベルアクセサリー
- ・芝恭子著作集編集委員会より、芝恭子(本学名誉教授)訳著『楓の記憶、紡ぐ言葉：来日カナダ婦人宣教師報告資料の翻訳と東洋英和女学院での幼児教育』教文館、2026年
- ・井上琢智元関西学院大学学長より、自著『黎明期日本の社会学者とキリスト教—福田徳三と吉野作造』信山社、2026年(福田満喜子の画像提供)
- ・田澤薫聖学院大学教授より、自著『子どもの主体を育む保育—興望館セツルメント史にみる子育て家族の支援』聖学院大学出版会、2026年(資料提供)
- ・椎橋信也氏より、椎橋句子氏(短期大学保育科昭和30年卒)自著『佛桑華(ぶっそうげ) 一兵卒が短歌で綴った太平洋戦争従軍記』2023年

## 資料ご寄贈のお願い

広報史料室では、学院の歴史や学校生活の様子を伝える資料、写真、記念品等を収集しています。お手許にあってご不要のものがございましたら、ご寄贈いただけますと幸いです。また、卒業生および教員の方々の著作も収集しています。

【お問い合わせ先】東洋英和女学院広報史料室  
(2026年4月より室名が変更となりました)  
〒106-8507 東京都港区六本木 5-14-40  
Tel 03-3583-3166 (直通) Fax 03-3583-3329  
E-mail archive@toyoeiwa.ac.jp